

The University of Texas Medical Branch (Galveston, TX, U.S.A.) への出向

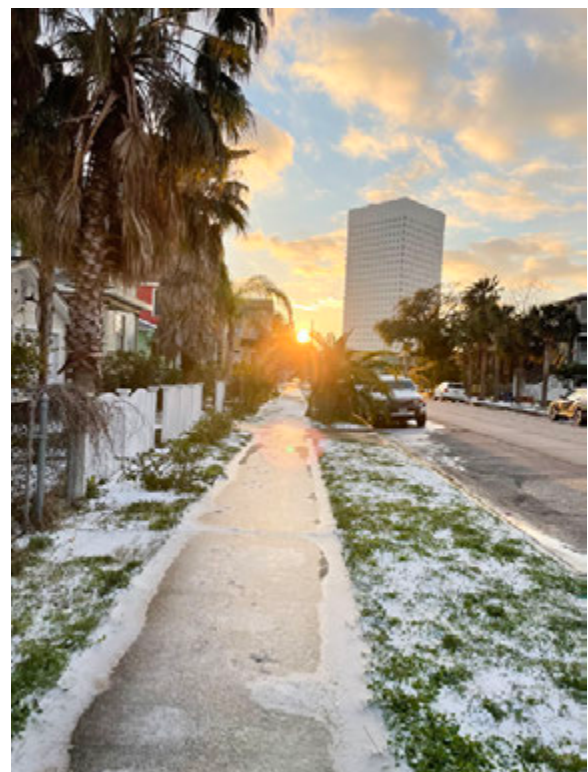
内科学Ⅱ教室 診療准教授

朝井 章

2021年12月現在、COVID-19の新たな変異株であるオミクロン株が世界中で猛威を奮っており、まだまだCOVID-19感染は治まりそうにもない。今からちょうど1年前2020年12月に僕は、アメリカで共同研究を行うべく渡米した。それは日本学術振興会科学研究費助成事業の一つである国際共同研究加速基金を2019年に獲得した上での計画であったが、数多くの問題を乗り越えたものであった。

2019年春、当時はまだCOVID-19による感染が世界中に蔓延する前の状況であり、獲得した研究費を用いて、同年夏から僕はThe University of Texas Medical Branch (UTMB)/ Division of Microbiology and Immunologyへの研究目的の出向を計画した。UTMBにおけるVisiting Professorという立場での出向手続きは順調に進んでいたが、それは途中で頓挫することとなった。当時、大統領であったトランプが米国における中国人スパイを問題視し始め、米国の知的財産権と米国民の個人情報を守るための様々な措置を突如行ったのである。尚、後日に(2020/7/24)、同じテキサス州に存在するヒューストン中国総領事館は、知財搾取の一大拠点となっており閉鎖に至っている。(その総領事館では、閉鎖直前に敷地内で大量の書類が焼却されている事が知られている。)それは出向先のUTMBでも同じように問題視されており、実際に多くの研究情報がスパイ活動により中国に流出していた事が疑われ、2019年8月頭に突然UTMBより海外からの研究者の受け入れを全て中止するという

方針が提示された。その方針を受け、僕はアメリカへの出向を急遽中断せざるを得ず、渡航を延期する事となった。その中止の方針は1年以上解除されず、その間に2019年末よりCOVID-19が世界中に蔓延するという未曾有の状況に陥った。その2点から予定が大幅にずれ込み、結局1年半後の2020年12月に渡米する事となった。ちなみに世界で最も早くRNAワクチン接種が開始されたアメリカでも2020年12月からの開始であり、このテキサス州でCOVID-19感染新規患者、死亡者が最も多く発生していたのもこの12月であることから、非常にリスクの高い時期における渡米であったと言える。



渡米してからもその大変さは変わらず、UTMBでの研究資格を得るまで2週間の隔離を含め1ヶ月程度の期間を要した。2021年1月からウイルスを用いた免疫学に関わる研究を開始した。研究そのものには大きな問題はなかったが、やはりCOVID-19感染状況から物流が遅延しており、なかなか予定通りには進まなかった。しかし、先方の共同研究者であるAshok Chopra教授は非常に協力的であり多くのサポートを頂き、基礎研究を順調に進める事ができた結果、予定よりも早く6ヶ月でUTMBでの研究を終了する事ができた。その後の継続した研究は本学で行う事とし、帰国する事にした。

帰国もまた大変であった。2021年6月は最も日本国内のCOVID-19患者が最も多い時期であり、大阪における医療崩壊が叫ばれ、簡単に入国が許可されない時期であった。入国の為には飛行機の搭乗前72時間以内のPCR陰性の結果が必須で、また日本の空港についても入国が許可されるまで2時間程度かけて、再

度PCRを行う必要があった。関西国際空港における待機中、PCR結果が陰性であれば待機場のモニターに番号が出るのだが、時々飛ばされる番号が存在する。それはCOVID-19陽性者が存在することを物語っており、僕の前後でも同様に番号が表示されていなかった。同じ飛行機搭乗者にCOVID-19罹患者が存在し、自分もそうではないかという焦燥感に駆られたが、幸いにしてPCR陰性であり入国が許可された。当然、その後は2週間隔離が必要であり、公共ではない移動手段を用い、ホテルにて待機をし、正式に本学に復帰したのは7月に入ってからとなった。

海外での研究を行う際に、これら前代未聞のイベントが多数発生し、研究以外の労力をこれだけ要する事はあまりないであろう。しかし、結果的にそれらを乗り越える事ができたという事は、それだけの意味がある研究だという天の啓示だと前向きに考え、得られた経験を活かし、引き続き研究活動を続けていきたいと思う。

